

研究報告
(研究プロジェクト)

メダリストへの軌跡 —川澄奈穂美—

川 澄 奈穂美

【経歴】

- 1993年－1997年 林間 SC レモンズ
- 1998年－2003年 大和シルフィード
- 2001年－2003年 弥栄西高校女子サッカー部
- 2004年－2007年 日本体育大学
- 2008年－2016年 INAC 神戸レオネッサ
- 2014年 シアトル・レイン FC (アメリカ／期限付き移籍)
- 2016年－2018年 シアトル・レイン FC (アメリカ)
- 2019年－(現在) スカイ・ブルー FC (アメリカ)

【競技歴】

《個人成績》

- なでしこリーグ 155 試合出場, 60 得点
- NWSL 86 試合出場, 18 得点

《獲得タイトル》

- 1997年 第2回全日本女子ジュニア(U-12)選手権大会第3位
- 1997年 第11回全国少年少女草サッカー大会 優勝
- 2003年 第4回ティファール・カップ レディース・フットサル大会
(全日本女子フットサル選手権大会) 優勝
- 2004年 第13回全日本大学女子サッカー選手権大会優勝
- 2007年 第16回全日本大学女子サッカー選手権大会優勝
- 2010年 皇后杯優勝
- 2011年 なでしこリーグ優勝, 皇后杯優勝
- 2012年 なでしこリーグ優勝, 皇后杯優勝
- 2013年 なでしこリーグ優勝, なでしこリーグカップ優勝,
国際女子サッカークラブ選手権優勝, 皇后杯優勝
- 2014年 NWSL シールド
- 2015年 皇后杯 優勝
- 2016年 皇后杯 優勝

《個人タイトル》

なでしこリーグ最優秀選手賞 (MVP) : 2回 (2011, 2013)

なでしこリーグ得点王 : 1回 (2011)

なでしこリーグベストイレブン : 4回 (2010, 2011, 2012, 2013)

なでしこリーグオールスター選出 : 3回 (2008, 2009, 2010)

NWSL ベストイレブン : 1回 (2014)

NWSL 週間最優秀選手 : 4回 (2014 第13週, 第16週, 2016 第11週, 2017 第5週)

NWSL 月間ベストイレブン : 1回 (2017年5月)

NWSL アシストラッキング1位 : 1回 (2017)

《代表歴》

U-19 日本女子代表 2004年 AFC U-19 女子選手権 (中国)

ユニバーシアード日本女子代表 2005年 ユニバーシアード (トルコ) 3位

なでしこジャパン

2008年 AFC 女子アジアカップ (ベトナム) 3位

2010年 AFC 女子アジアカップ (中国) 3位

2010年 アジア競技大会優勝

2011年 FIFA 女子W杯ドイツ優勝

2012年 ロンドン五輪準優勝

2013年 女子東アジアカップ準優勝

2014年 AFC 女子アジアカップ優勝

2014年 アジア競技大会準優勝

2015年 FIFA 女子W杯カナダ準優勝

2016年 リオ五輪アジア予選

2018年 AFC 女子アジアカップ優勝

国際Aマッチ 90試合出場, 20得点

(2019年10月12日現在)

※全て年度表記

1. 競技との出会い

私がサッカーと出会ったのは幼稚園生の頃、父と3つ上の姉と一緒に社会人チームのサッカーの試合を観戦した時のことである。初めにサッカーに興味を持ったのは姉の方で、試合観戦後、姉が「サッカーチームに入りたい!」ということで地元の林間SCレモンズに入団した。(正確に言うと、初めは通っていた小学校のチームに入団したが、女の子が姉一人しかおらずすぐに辞めてしまった。その後、隣の小学校に女子だけのチーム

があることを知りそちらに入団することになった。) 当時、チームに入団できるのは小学2年生からで、幼稚園生だった私は正式なメンバーではなかったが、グラウンドの端っこでお姉さん達の真似事をするようにボールを蹴り始めた。手の空いているコーチが練習相手をしてくれたり、私でもできそうな練習には参加させてくれることもあった。サッカーと呼ぶには程遠かったが、“球蹴り遊び”がとにかく楽しかった。その頃から小学生になったらチームに入団してサッカーをすることが当たり前のことだと思っていて、その思い

は全く変わることなく小学2年生でチームに入団し、私のサッカー人生は始まったのである。

ちなみに、小学2年生の時の将来の夢はすでに「サッカー選手になるんじゃ〜!!」でした。

中学校に上がる時、林間 SC レモンズの指導者や保護者が中心となって地元で大和シルフィードという社会人チームが誕生した。中高ではそのチームに所属し、高校では女子サッカー部にも入部した。「サッカー選手になるんじゃ〜」という夢と共に日々練習に励んでおり、高校を卒業しても当然サッカーを続けるつもりであった。当時の女子サッカー界では上手な選手たちは高校卒業後、トップリーグ（なでしこリーグ）へ行くという流れが存在した。しかし、私は高校卒業後にトップリーグへ行くという考えは微塵もなく、そもそもそのレベルにない私にトップリーグから声など掛けてもらえるわけもなく、高校卒業後は大学へ進学することしか考えていなかった。実は進学先の第一希望は日体大ではなかったが、強豪のサッカー部があり、実家から通えることや教員免許を取得できることで親に上手く誘導され、気付いたら日体大に願書を提出し、合格通知を受け取っていた。

こうして私の日体大での生活が始まった。

2. 日体大での思い出（選手生活の思い出）

日体大での生活は私の人生において強烈なインパクトがある。それはどちらかというと上下関係や仕事の大変さといった競技外のところなのだが、その話をするとかなり長くなってしまっているので、今回は競技関連のことを述べさせていただく。

有難いことに私は1年生の頃からレギュラーとして試合に出場することが出来た。ピッチ上では上下関係はなく、様々な試練を乗り越えてきた先輩方に引張ってもらい伸び伸びとプレーすることが出来た。インカレ優勝も経験し、とても充実した日々を送っていた。2年生になると日体大女子サッカー部史上初のインカレ予選敗退を経験し

た。個人としてはユニバーシアード代表として初めての世界大会に出場し、たくさんの刺激を受けた年にもなった。3年生になり、日体大女子サッカー部の名誉を挽回すべくインカレで決勝まで駒を進めたが、惜しくも準優勝。いよいよ大学最後の年。4年生となった今年は何としてもインカレ制覇と意気込んでいた。そんな時、監督であった森田先生が急逝。先輩方が引退し、私たちの代が最高学年であり、監督と共にチームを引っ張っていかうと思っていた矢先の出来事だった。いつもの確かなアドバイスをしてくれる選手想いな監督で、選手たちも大変慕っていたのでショックは本当に大きかった。森田先生の為にもインカレ制覇への想いは益々強くなった。

私自身もこの年に賭ける気持ちはとても大きかった。しかし人生とは何が起こるか分からないもので、4月に前十字靭帯を断裂してしまう。このタイミングで怪我なんてと思ったが、落ち込むことはなかった。私のサッカー人生はこれからもまだまだ続くし、手術とリハビリをすれば治る怪我なので、復帰に向けてすぐに気持ちを切り替えた。とはいえインカレがあるのは12月と翌年1月で、前十字靭帯のリハビリ期間は約6〜8ヶ月と言われており、インカレまでに復帰できるかどうかはギリギリのラインだった。人生初の手術を受け、リハビリを開始。リハビリ中に心掛けたことは、何事も試合をイメージして行うこと。どんなに地味なトレーニングも必ず試合に通じていると考え、その意識を持ってリハビリに取り組んだ。また、トレーニングルームでやるリハビリは全体練習の前に終わらせて、全体練習の時は私もピッチでみんなと同じ時間を過ごすことにした。練習を観ることで、全体のイメージを共有できると考えたのである。一緒に練習ができなくても、その場にいることでチームの一員であることをしっかりと自覚し、早くここに帰りたいたいという気持ちを継続させ、益々リハビリに励むことが出来た。そんな姿を見てくれていたからか、チームメイトはいつも励ましの言葉を掛けてくれ、私の心の支え

となってくれた。もちろん怪我はしない方が良いに決まっているが、怪我をしたことで学んだことや感じられたこともたくさんあった。自分の身体や必要なトレーニングのことを知る良い機会にもなり、怪我をした経験は現在の選手生活にもプラスの影響を与えている。

リハビリは順調に進み、インカレ予選3戦目で試合復帰することができた。チームメイト達のお陰で予選を突破し、準決勝と決勝も途中から出場できた。そして悲願のインカレ制覇。部員55人が一つになり掴んだ優勝だった。部員が多いとチームとしてまとまりづらい場合もあるが、この時のチームはとにかく全員が同じ方向に向かって戦うことが出来ていた。大人数がまとまると、こんなにも大きなパワーになるのかと驚かされた。

大学での選手生活で私が特に心掛けていたことは「意識・無意識」である。課題を見つけたら、それが無意識でできるようになるまで意識してやるということである。初めは意識してもできないことが、意識しやり続けることで少しずつできる回数が増え、最終的には無意識でもできるようになる。無意識でできて初めてそれを自分の実力と言えるし、無意識でできることを増やす為にたくさん意識して練習に取り組んでいた。これは今の私のプレースタイルの土台となっているものである。

心技体全てにおいて成長させてくれた日体大での4年間の選手生活は、私にとって一生の財産だ。

3. オリンピックでのメダル獲得

2012年8月9日ウェンブリー・スタジアムで行われたロンドンオリンピック女子サッカー決勝。アメリカ代表対日本代表の試合を観るために、サッカーの聖地であるこのスタジアムに80,203人もの観客が集まった。そして、このピッチに私は立っていた。

決勝まで行けると信じて疑わない大会であった。根拠はない。このチームの雰囲気私をそう

思わせてくれているのだ。予選から厳しい戦いが続いたが、予選を突破し、準々決勝対ブラジル、準決勝対フランスに勝利し決勝まで進んだ。ブラジルにもフランスにも内容では圧倒されていた。それでも全員で走り身体を張って、数少ないチャンスを物にして勝ち上がった。フランスに勝った時点でメダルが確定していた。女子サッカー史上初のオリンピックでのメダル。このメダルの色を最高に輝かせる為、最後の戦いが待っていた。

決勝戦の相手は強豪・アメリカ。前年のW杯で日本はアメリカに勝利して優勝した。世界大会決勝で2大会連続同じ顔合わせとなった。W杯では日本が勝ったが、アメリカの方が圧倒的に格上であることに変わりはない。ただ、勝算が無いわけでもない。臆することなく立ち向かい、自分たちのサッカーをする、それが日本が勝つ為にすべき事であった。

試合開始時間が近付き、ピッチに入場する。憧れのウェンブリー・スタジアム、スタンドから溢れんばかりの大歓声、ずっと夢だったオリンピック決勝の舞台に心が震えた。同時にとても冷静だった。いつもと同じ1試合。

キックオフの笛が鳴った。一進一退の攻防が続いた。先制したのはアメリカ。追加点を決めたのもアメリカだった。0-2のビハインド。それでも諦める選手は誰もいなかった。日本が1点を返した。もう1点。もう1点。その1点が遠かった。

日本は銀メダルに終わった。いや、銀メダルを獲得した。どちらの表現が正しいのか私には分からない。日本女子サッカーにとっては大きな大きな銀メダル。でもやはり悔しかった。やっている選手達は金メダルが良かったに決まっているが、これが実力なのだ。金メダルが良かったが、これまでやってきたことが報われた価値のある銀メダルだったとも思う。

試合後、悔しかったが涙が出ることもなく、もっとどうすれば良かったんだろうとすでに試合を頭の中で分析している自分がいた。それなのに少し時間が経ってから、この結果に対する感情ではな

く、今まで支えてくださった方々や応援して下さった方々への感謝の気持ちが溢れ出して涙が止まらなくなった。ホテルへ帰るバス車内での出来事だ。このメダルは家族、友人、スタッフ、関係者の皆様、そしてファン・サポーターの皆様の支えがあって獲得することが出来たのだ。何より、一緒に戦ってきたチームメイトたちに本当に感謝している。W杯の時もそうだったが、こんなに心強いチームメイトたちと共に大好きなサッカーができることを心から幸せだと思った。

色々な感情、色々な景色に出会わせてくれたオリンピック。生涯私の心に刻まれることだろう。夢に見ていたオリンピックの舞台は私の想像を優に超える輝きを放っていた。

4. その後の人生

オリンピックが終わっても、またオリンピックはやってくる。そしてオリンピックに限らず、私のサッカー人生は続いている。

ロンドンオリンピックの後、国内で1年プレーし、その後初の海外移籍を果たした。代表ではカナダW杯決勝でまたアメリカに敗れたり、リオオリンピック出場が叶わなかったりと結果が出せなかったが、全ての経験が私の人生の糧となっている。現在はアメリカのリーグでプレーしていて、5シーズン目を終えたところである。まさかこんなに長いことアメリカにいるなんて考えもしなかった。

アメリカでのサッカー生活は毎日とても刺激的である。上手いかないことも沢山あり、英語で伝えられずもどかしい気持ちになる毎日だ。（それならば英語の勉強をしろというのは百も承知ですができません。）でも日体大で鍛えられたのでちょっとやそっとのことではへこたれない。何よりサッカーが大好きだから。サッカーを想う気持ちは日体大でサッカーをしていたころよりも確実に大きくなっている。

無我夢中でサッカーをして、チームメイトたち

に引っ張ってもらいオリンピックでメダルを獲得することができたが、今振り返っても夢だったんじゃないかと思う。いつまで続くのか分からないサッカー人生で、この夢のような瞬間にあと何回出会えるのかは未知だが、また出会う為に、私はこれからもサッカーと共に駆け抜ける。

5. 後輩に一言

『死ぬこと以外はかすり傷』

私が好きな言葉です。言葉の通りです。死ぬこと以外はかすり傷です。やりたいことがあるならやりましょう。なりたい自分がいるならなりましょう。その為にはたくさん努力して、たくさんチャレンジして、たくさん失敗する必要があります。

人生は、良い意味でも悪い意味でも自分の思い通りにはいきません（だから楽しい!）。プランはあってないような物です。大学生の頃、自分がアメリカでプレーするなんて全く想像していませんでした。それが気付けばもう5シーズンアメリカでプレーしています。私の人生プランに海外でプレーするという項目はなかったです。でもアメリカでのサッカー生活はとても充実していて今とても楽しいです。なぜ、プランになかったことを軸に楽しむことができているのかというと、目の前のことに全力で取り組んで来たからです。その中で新たな自分の感情と出会い、その感情と向き合い、「したい・やりたい」を実現させる為に行動して来ました。何事も積み重ねの先にやりたかったこと、なりたかった自分が待っています。人生とはその繰り返しだと思います。

自分の可能性を信じて挑戦し続けましょう。可能性は無限大です。人生一度切り、楽しんだもの勝ち。全く“一言”ではありませんでしたが、とにかく皆さんの挑戦を応援しています。

